県 古寺山自奉楽 ㉖

大字上小山田に伝承された民俗芸能です。自奉楽は寺法楽のことで、上小山田にある古寺山白山寺に奉納される踊りで、宝暦2年(1752)当時の白山寺住職清光和尚が荒廃した寺の再建を志し、村の子供を集めて踊りを仕立て、村々からの浄財を集めた時の踊りが古寺山自奉楽といわれています。この踊りは、平鍬踊り、田植踊り、獅子舞の三部構成で、踊り子は8歳～14歳ぐらいの少年少女約50人からなり、男子は奴、女子は早乙女といいます。奉納は33年毎の旧3月10日に行われるものとなっていましたが、現在は毎年旧正月2日に奉納されます。

県 関下人形 ㉗

大字仁井田字関下の民家の土蔵と区の郷倉から江戸時代に流行した人形芝居の「操り人形」がたくさん発見されました。主なものは、人形の首85点、肩板、手足、胴55点、衣裳82点などで、人形の首は桐と檜で作られ、目、口、眉が動くようになっています。また、頭部の鬘はキリで穴をあけて毛を植えた「植毛」という方法で作られています。当時関下村には「結城座」という人形芝居一座が結成され、県内各地を主として興行し、村を挙げて維持振興に努力したことが古文書によって知ることができます。しかし、時代の流れとともに、大正12年～13年ごろ芝居の幕を閉じてしまいました。

県 桐文木彩漆笈 ㉘

室町時代の修験者などが用いた箱笈(仏具・衣服・食器などを入れて背に負う箱)で、大きさは柱高75.8cm、間口69.3cm、奥行35.5cmあります。物を入れる部分は三段造りで扉は三段とも観音開きになっており、脚は前面部の二脚だけという珍しい笈です。扉両側の羽目板に枡形格子の地文を彫り、花先風の刳形を横連子に扱った鎌倉彫り式の彫刻が施されています。扉にはそれぞれ丸い輪郭をとり、その中に桐文を彫刻し金箔を押すといった格調高いものです。総体は黒漆塗りですが、柱の削面、地文、刳形の部分は朱漆が塗られています。この笈はもと清水山行法寺に伝えられたものです。

県 絹本著色亜欧堂田善画像 ㉙

亜欧堂田善(本名 永田善吉)は寛延元年(1748)須賀川に生まれ、洋画と銅版画を学び、我が国の初期洋風画に大きな影響を与えた芸術家で、当時の白河城主松平定信公のおかかえ絵師として活躍した人です。この画像は文政5年(1822)田善の弟子である曙山田一(遠藤田一)によって描かれたもので、画像の右上に「文政５壬午年亜欧堂□曙山田一字如洋謹写」と書かれています。田善は文政5年5月7日に亡くなっていることから、この画像は田一が師を追慕するために描いたものと思われます。田善の墓は、市内長禄町の長禄寺にあります。

県 太田貞喜の亜欧堂田善コレクション ㉚

本コレクションは、昭和51年医師太田宏一氏から須賀川市に寄贈されたもので、宏一氏の祖父太田貞喜氏が田善の銅版画を郷土の誇りとして、私財を投じ散逸を防ぐために収集したものです。全国的にみても質・量的に高い資料価値があり、我が国の初期洋風画を研究する上で欠くことのできない作品群です。主な作品には、銅版原版の洋人曳馬図をはじめ、銅版画の大日本金竜山図・品川月夜図・西洋帆船図等があり、西洋の画法である遠近法をたくみに取り入れた立体感のある作品は、繊細で緻密な作風と相まって見事な芸術作品となっています。
(写真は榎坂溜池之景)